

第73回 広島県幼稚園教育研究大会  
フレール祭

保育の原点に還る  
—子どもを理解するということ—

福山市立大学教育学部  
池田 明子

# 本日の流れ

- ・はじめにーなぜ子ども理解が保育の原点かー
- ・「子ども理解」とは
- ・何のための子ども理解か
- ・どのように子どもを理解するのか
- ・おわりにー改めて子どもを理解するということ

## はじめにーなぜ子ども理解が保育の原点かー

フレーベルに依ると幼児は弱い存在であるよりは、寧ろ偉大な創造力を秘めている強い生命体である。（中略）だから児童の活動や行動は総て目覚めつつある児童生命の 現われと見なければならぬ。

荘司雅子「幼児期の教育」広島大学教育学部附属幼稚園  
（現：広島大学附属三原幼稚園） 創立四十周年記念誌

児童は彼の教育学の主体であって、「児童のうちに未来の種子が秘められている」とは有名な彼のモットーだった。しかもその種子を要するに神性と解し、無限なものと解し、絶対と解した彼は、児童を重んずるというよりは、むしろ児童を畏敬した。

長田新（1981）「フレーベルに還れ」フレーベル館

## 「子ども理解」とは

幼児を理解するとは一人一人の幼児と直接に触れ合いながら、幼児の言動や表情から、思いや考えなどを理解しかつ受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとする事。

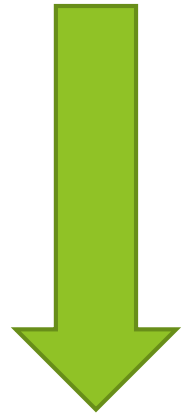
文部科学省（2019）「幼児理解に基づいた評価」

チャイルド本社

## 子どもを理解すること

“しる”：理性的子ども理解

“わかる”：感性的子ども理解



室田一樹（2016）「保育の場で子どもを理解すること～エピソード記述から”しる”と”わかる”を考える～」  
ミネルヴァ書房

## 子どもを理解するために

- ・プロフィール：客観的に捉える
- ・エピソード：主観的（心の通じ合い）に捉える

## 子どもを理解するということ

### 理解することと理解できないこと

保育の実践の経過の間に、最初は理解できなかったことが次第に理解できるようになってくるということも、また知るわけでありませす。しかし、なおかつ、理解できないことというのがどうしても残ってくる。今進行中のこれらの事柄について、理解できないことがいっぱいあります。この理解できないというのが、むしろそれが本質をなしているんじゃないかと思うんです。そのなかのごく一部が我々に理解できるかたちになるのであって、その根本はむしろ理解できないことに満ちているような気がいたします。



津守眞「保育の現在—学びの友と語る—」（2013）萌文書林

「子ども理解」は保育の原点でありながら、「理解できている」とは限らないことを自覚する

## 何のための子ども理解か

- ①子どもの世界にふれる
- ②子どもの思いの背景にふれる
- ③保育を展開するうえで必要な「子ども理解」
- ④人として共に「在る」存在としての「子ども」を理解する
- ⑤子どものことを想う

## ①子どもの世界にふれる

### (例) 3歳児のつぶやき

- 「カブトムシはどうやって手を洗うんかねえ」
- （かき氷を食べながら）「もう食べられないよ。  
お腹の中が冷蔵庫になっちゃったよ」
- （夕方、夕焼けの空を見て）「お外がしあわせのお空になるよ」
- 「よわて」



## ②子どもの思いの背景にふれる

(例) AちゃんはBちゃんにおもちゃを譲る。



- ・ AちゃんはBちゃんのこと大好き
- ・ Aちゃんはおもちゃで遊ぶことに飽きている
- ・ AちゃんはBちゃんのこと怖くて何も言えない
- ・ 「おもちゃは仲良く使ってね」といつも言っている先生が、今もそばにいて、じっとAちゃんを見ている

### ③保育を展開するうえで必要な「子ども理解」

子どもにとって：「遊び」は目的  
“楽しいから遊ぶ” “遊び込む”

子どもの主体性



子どもを理解する

保育者にとって：「遊び」を通して育まれている  
心情・力を見取る

保育者の意図・ねらい

「5領域」「幼児期に育みたい資質・能力」「幼児期の  
終わりまでに育ってほしい姿」

エピソードから読み取ってみよう

～幼児期に育みたい3つの資質・能力～

知識・技能の基礎

(例) 基本的な生活習慣・身体感覚の育成

様々な気づき・発見の喜び 等

思考力・判断力・表現力等の基礎

(例) 他の幼児の考えなどに触れ、新しい考えを生み出す喜び

言葉による伝え合い 等

学びに向かう力・人間性等

(例) 思いやり・安定した情緒

葛藤 自分への向き合い 折り合い 等

サルビアの蜜を吸ったよ（3歳児）

20020521

去年の年少組さんも保育室前のプランターに植えているサルビアの花があり、その蜜が吸えることを教えていました。するとですね、その子どもたち（今の年中さん）が年少組保育室前でサルビアの蜜を吸っているんですね。さあ、今の年少組さんが、**年中さんは何をしているんだろうと数人じっと見ています。**年中さんはそれは優しく「この長いところを取って、白いところを吸うんよ」と教えてくれます。でもね、**いきなり真似をするのはやはり恥ずかしさもあるのでしょうかね、その時には表情を変えず、かたまっているんですけど・・・。**さあ、年中さんがいなくなっただけで、年少組さんが本領発揮するのは！まあ、たった1個のプランターにどうしてああもかたまれるのかと思うくらい、**群がってサルビアの蜜を吸っているわ、吸っているわ！**ああ、花そのものが全部なくなったらどうしましょう！思わず先生はすかさず「こっちの短い花は蜜がないから取らないでね。この長い所に蜜があるからね」と声をかけるんですけどね。もう一つ、吸った花びらが散乱していたので、「**吸った花は土に返してあげると、土の栄養になるんだよ**」ということも伝えましたけれど。ああ、サルビアさん、元気でね。

## こいのぼりってどうして動くの？（5歳児） 20090501

こいのぼりが風にはためいている時のこと。子どもたちのつぶやきをきっかけにしながら、みんなに「こいのぼりってどうして動くの？」と尋ねてみますと、子どもなりの声が聞こえてきました。

- ・ 風がふいてるから。
- ・ ほねが中にあるから。
- ・ お友だちが下で揺らしてるから。
- ・ ハチが来てるから。

もう少し心に響く体験をしたいなと願い、更に「みんなでこいのぼりを作ったらいいなと思うんだけど、どんな材料で作ったらよく飛ぶと思う？」と尋ねてみました。

- ・ ビニール袋
- ・ ゆるい紙（やわらかい紙）
- ・ 大きい紙
- ・ 穴をあけたらいい。風がはいるように。
- ・ 段ボールがいい
- ・ うちわがあったらいい。かぜをいっぱいふかすよ。

そこで、子どもたちの言うようにビニール袋や柔らかい不織布・硬い画用紙の大きさを揃えて、自分で材料を選んでこいのぼりを作りました。どうしてその材料を選んだのかを尋ねてみますと、とても様々な声が返ってきました。

### <不織布>

- ・クルクル回るけえ。 ・やわらかかったらとぶから。
- ・もっと重い紙だったら風がふいてもとばんけえ。
- ・しっぽから風が入るから。 ・ばあちゃんちでこんな紙で作ったけえ。

### <ビニール袋>

- ・やわいけえ。 ・なんか飛びそう。 ・かわいく飛びそう。
- ・かるくて空気が入りやすいから。 ・でかかったらきれいになるから。

### <硬い紙>

- ・やわらかい紙だとすぐにやぶけちゃうから。
- ・風が吹いたら牛乳パックとか飛ばされるけえ。 など

自分なりに考えるその内容は様々ですが、何が正解かを求めるのではなく、今は自分なりに考えたり感じたりして、その思いを素直に出せることを大切にしたいと思い、こちらは聞き役に徹しました。ひもにぶら下がったこいのぼりの様子を見ながら、いろいろなつぶやきが聞こえてきます。

- ・「あっ、動いた！」「揺れたよ！」とこいのぼりの動きをよく見ている姿。
- ・「飛ばんねえ」とつぶやいている姿。こいのぼりは風に揺られてはいるのですが、“揺れる”と“飛ぶ”は違うイメージに思えるのでしょうか。
- ・「なんか（こいのぼりが）踊りよるみたいじゃね」

自分の思いや考えに自信をもち、また友達のアイディアのよさにも気づきながら、「面白い」「どうしてだろう？」と感じたことにかかわったり、試したりすることをこれから少しずつ積み上げていきたいなと願います。またこのような体験を通して、風の心地よさをしっかり感じてほしいなと願います。

#### ④人として共に「在る」存在としての「子ども」を理解する

- ・ 原点：子どもをあるがままに認める

津守真著「保育者の地平」 (2010) ミネルヴァ書房

- ・ 「あっち、いって！」  
1歳児エピソード



先日、あるお母さんから次のようなお手紙をいただきました。  
“お友達とのかかわりの中でジ〜ンとすることがありましたのでお手紙にしました。子どもに教えられることが多いですね”という文章から始まっています。

先日、こんな話をしてくれました。「僕、お帰りの時にいつも一番になれなくてもいいんですよ。お友達が教えてくれたけど、一番になろうと思ったらその事しか考えてないから、心が一つしかないんだって。でも一番になれなくてもお友達を待ってあげたり優しくしてあげたりしたら、心がいっぱいになるんだって。心はたくさんある方がいいもんね。だから一番でなくてもいいんですよ。」

## ⑤子どものことを想う

「子どものことを想う」保育者の営み



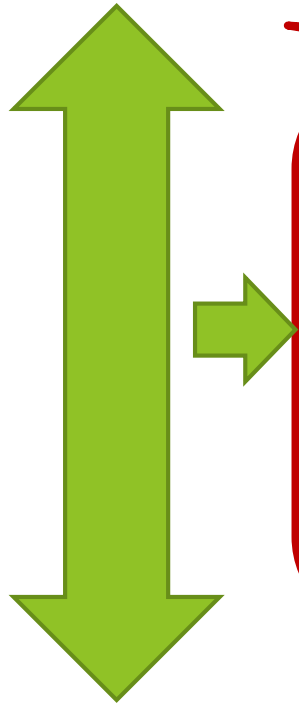
つながる  
伝播する  
温かい雰囲気

「保育者のことを想う」子どもの営み

<エピソード> 「私が見ておいてあげようか？」

# 子どもとの応答関係を通して見えてくる子ども理解

保育者



子ども

- ・ 保育者としてのねらい・願い（客観的）をふまえた理解  
～保育者としての営み～
- ・ 人としての感覚的・情感的（主観的）理解  
～人としての営み～

温かい雰囲気

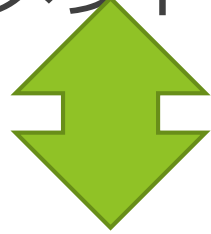
# どのように子どもを理解するのか

- ①子どもを理解することの「構え」
- ②子どもを理解することの「揺らぎ」
- ③子どもを理解することへの「狎れ」
- ④子どもを理解することの「喜び」
- ⑤相互に理解し合うことの「喜び」

## ①子どもを理解することの「構え」

- ・視点を**もつ**ことの必要性（客観的に）

⇒「カリキュラムマネジメント」を核にした保育の質の向上



- ・視点を**もたない**ことの必要性（主観的に）

省察：保育を精一杯過ごした後で、必然的に「思い起こされ」「その時の感覚をよみがえらせる」行為。

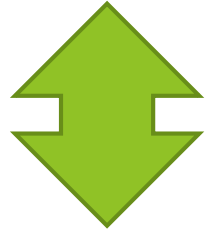
浜口順子（2019）「津守真の子ども研究における時間性」発

達160Vol.40 ミネルヴァ書房

⇒・無心に、無私に、無邪気に

## ①子どもを理解することの「構え」

・自分の子ども観・教育観・価値観を通して見えるもの



・自分の子ども観・教育観・価値観を通して見えなくなるもの



自分の感度を研ぎ澄ませる

多様な子ども観・教育観・価値観にふれる⇔自分に問い続ける  
理解しきれない自分を自覚する

## ②子どもを理解することの「揺らぎ」

子どもの主体：子どもを丁寧に見取り，理解する



・子どもと保育者の関係性・立ち位置：通じ合う・揺らぐ・葛藤する・駆け引き・ほどよい加減・包み込む・譲れない



保育者の主体：ねらいや願い，本当に大事にしたいことをみつめる

保育：子どもの主体性と保育者の主体性が寄り添い合い，混ざり合い，ぶつかり合う場

### ③子どもを理解することへの「狎れ」

#### 保育の中の落とし穴

- ・ 何のための記録なのか
- ・ 幼児理解と称し子どもにレッテルを貼る
- ・ 理解したという思いあがり

高杉自子「子どもとともにある保育の原点」 (2006) ミネルヴァ書房



- ・ 「理解しようとする」ための記録・謙虚な営み
- ・ 「理解しようとする事」が伝わる



#### ④子どもを理解することの「喜び」

他者の理解においては、同じ想いになることではなく、じぶんにはとても了解しがたいその想いを、否定するのではなくそれでも了解しようと想うこと、つまり分かろうとする姿勢が大事だということである。そして相手には、**そのなんとか分かろうとしていることこそが伝わるのだ。**

鷺田清一「大事なものは見えにくい」(2020) 角川文庫

「保育者が子どもを理解する」というより

「保育者が子どもを理解しようとしていることが子どもに伝わる」



保育者が傍らに在ることの幸せを感じる



生きる喜び・勇気・原動力

## ⑤相互に理解し合うことの喜び

津守は子どもと保育者との「相互性」も重要な契機であると考えています。したがって、**存在の承認も相互的**なものであるといえます。すなわち、**保育者は子どもにより自分の存在を肯定される**ことを必要としている。では、存在の肯定はどのようになされるのでしょうか。それは「笑顔のまなざし」によります。（中略）自分の存在が肯定されていると感じるとき、**私たちは**「生きている喜び」を実感することができます。

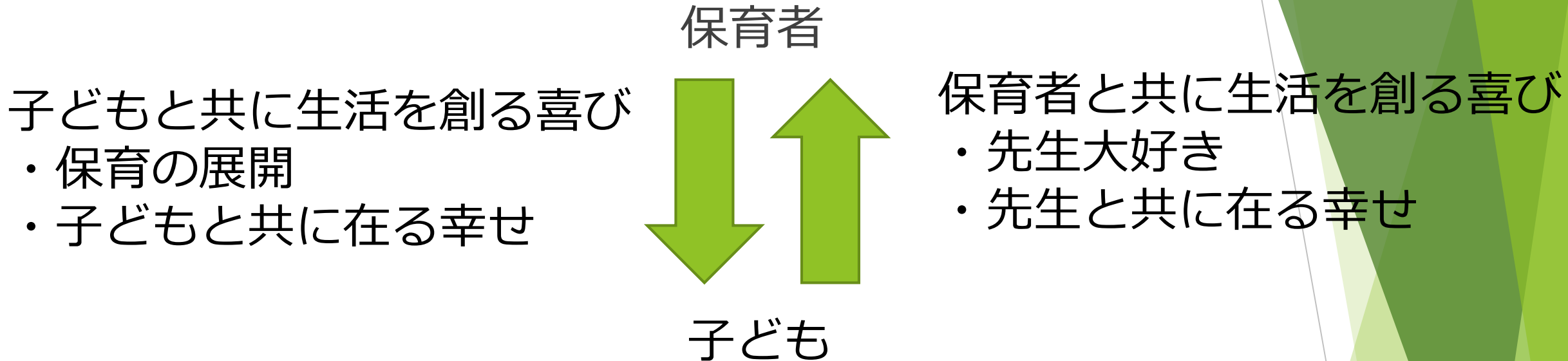
榎沢良彦（2019）津守保育論と愛育養護学校 発達160Vol.40 ミネルヴァ書房

相手（保育者・子ども）が傍らに在ることの幸せを感じる



生きる喜び・勇気・原動力を育み合う「私たち」

## ⑤相互に理解し合うことの喜び



フレーベルの心の眞の動きそのものは、教育学や心理学であるよりも、もっと人間的なものであったのではあるまいか。すなわち、子どもたちに、その幼児期の幸福を完うさせてやりたかったのではなからうか。

倉橋惣三著 「フレーベル」 (1939) 岩波書店

## 心と心が通じるということ（5歳児） 2004316

「エルマーとりゅう」の探検に行った時のこと。子どもたちはエルマーとりゅうからもらった宝物（子どもたち全員分のお手紙つきの折り紙）を見つけて保育室に帰りながら、「あっ、りゅうの体が見えた！」「りゅうくん～！ありがとう～！」と空に向かって大きな声でそれはそれははりきって嬉しそうに叫んでいました。本当に素直な子どもたち。先生はこんなに素直なあなたたちと過ごせて本当に幸せだよ。きっと、りゅうくんやエルマーくんが夜遅くまで折り紙を折ったのだと思います。”子どもたちは果たして喜んでくれるかなあ”なんて思いながら・・・。子どもたちが折り紙を大事そうにわざわざビニール袋に入れて持ち帰っている姿などを見ると本当にうれしかったですね。やはり心は通じるのですね。夢や希望をもち続ける気持ちをお忘れなでね。

子どもたちの卒園というひととときに、「しあわせ」について考えてみました。人によってしあわせの中身は様々なかもしれませんが、心と心が通じ合ったという実感を味わっている時に、“しあわせ”なのかもしれません。これから未来を生き抜いていく子どもたちが、心が通じ合う対象を少しずつでいいから見つけていって、“しあわせ”な人生を築いていってほしいと心から願います。“しあわせ”を感じている時には必ず“ほほえみ”が伴います。もしかしたら大きな苦難を乗り越えた後に感じるしあわせだったあるかもしれない。どうぞ“ほほえみ”を忘れない人生を”

## おわりに一改めて子どもを理解すること

- ・ 子ども理解：子ども自身の尊重
  - ・ 保育者としての専門性：次代を担う子どもを育成する責任・使命
  - ・ 子どもと保育者相互の尊重
- ⇒人が人と共に生きていく営み：共に在ることの幸せ

そして・・・

フレーベルが晩年好んで用いた「さあ、私たちの子どもたちに生きようではないか！」ということばは、単に子どもの「ために」生きるとか、子どもと「一緒に」生きるとか、子どもの「中に」生きるとかを意味するのではなく、子どもの統一的な生命にふれることによって、われわれ自身が、失われた生命の統一を回復することができ、また、そうあらねばならない、ということの意味していたのである。

小笠原道雄(2021)「原典資料の解読によるフリードリッヒ・フレーベルの研究」

福村出版